

Title	<教室通信>最近の工学研究科・工学部ならびに全学の状況
Author(s)	北野, 正雄
Citation	Cue : 京都大学電気関係教室技術情報誌 (2013), 29: 64-64
Issue Date	2013-03
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/176901">http://dx.doi.org/10.14989/176901</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

**教室通信****最近の工学研究科・工学部ならびに全学の状況**

電子工学専攻教授 工学研究科長・工学部長 北 野 正 雄

2012年4月から工学研究科長・工学部長を務めております。最近の工学研究科・工学部ならびに全学の状況を簡単にご報告したいと思います。

現在、桂キャンパスへの物理系専攻の移転作業が進んでおり、2013年3月までに完了する予定です。2003年に化学系、電気系から始まった桂キャンパスへの移転は、10年の歳月を要してようやく完了します。そして、京都大学の3番目のキャンパスとしてフル稼働を開始することになります。ただし、諸事情から一つの専攻（材料工学専攻）だけが吉田キャンパスに残ることになってしまいました。また、学部教育の拠点である工学部は従来どおり吉田キャンパスにとどまります。そのため、再配置に伴う吉田キャンパスの環境整備を速やかに行う必要があります。さらに、残った専攻の移転、桂図書館、ビジターや留学生向けの宿泊施設、学際研究、産官学研究スペースの整備拡充なども引き続き進める必要があります。いずれにしましても、この機会に一度桂キャンパスに足を運んでいただければ幸いです。

全学的には教養共通教育の本格的な改革が進められています。1993年に教養部が廃止されて以来、学部の教養共通教育はどちらかというとバーチャルな組織体制で運営が進められてきました。その結果、各授業のレベルはそれぞれの教員の力量や努力で維持されてはいるものの、科目間の体系性や順次性に関する配慮が十分されてきたとはいえ、また最近の新入生の学力や気質の変化への適応も十分ではありませんでした。特に、受験向けに調整された高校までの勉強方法からの脱却に失敗し、早い時期から落ちこぼれて遭難してしまうケースが目立つようになってきています。このような問題点の解消に取り組むために、国際高等教育院（仮称）の設置に向けた作業が進行中です。この新組織は、各部局の協力の下、教養共通教育の企画、調整と実施を一元的に所掌するものです。特に企画機能を充実させ、新時代にふさわしい教養共通教育を実現することを目指しています。教養共通教育は、学部4年一貫教育の基盤を担う部分であり、各学年1000名近い学生を擁する工学部としても、国際高等教育院の運営に積極的に関わってゆく必要があります。

並行して、学部入試についても、高大接続型京大方式特色入試の名称のもと、新たな仕組みが現在検討されているところです。特に、現在の入試制度全般が招来しているさまざまな問題点を緩和し、自発的な学びの姿勢と勉学への志が重要視されるという本来の状況を取り戻すことを目指しています。

大学院教育に関しては、平成23年度から24年度にかけて、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムに京都大学から次の4件が採択されています：「京都大学大学院思修館」、「グローバル生存学大学院連携プログラム」、「充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム」、「デザイン学大学院連携プログラム」。これらはいずれも俯瞰力と独創力を備え、グローバルに活躍するリーダーの育成を目指すプログラムであり、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫の学位プログラムを構築・展開するものです。これらの大学院プログラムの教育には、工学研究科、情報学研究科、エネルギー科学研究科などから多くの教員が参画しております。

ご存じのとおり、昨今の大学を取り巻く状況は、国内外の現状を反映して、一層厳しさを増しています。国の財政状況の悪化に伴い、大学の基盤的経費や人件費は前例のないほどのペースで削減されようとしています。（一方でこれらの緊縮モードと相容れないような政策が景気浮揚をめざして進められようとしています。）このような混乱した状況下において、単純に大学の教育研究機能を縮小・後退させることは、何としても避けなければなりません。困難な時代にこそ、教育・研究に力を注がなければならないことは、米百俵の故事を待つまでもないことです。社会から幅広いご支援とご理解を得ながら、さらに開かれた大学として成果を目に見える形にして還元してゆく努力をする必要があると考えております。